

潮鳴り

おまえとふたり  
冷ややかな頬を  
押し当ながら眠る夜  
蠟燭のほのめきが  
まぶたを叩く

いつこうに静まらない  
水のかなたで  
忘却がやがて  
歌いだす

そんなに遠くまで  
おまえは行っていたのか

小舟はゆられ  
小舟はゆられ

銀河のほとり  
もやいは解かれ  
幾多の春はめぐりあう  
幾多の花は煙りだす